

渡辺武達訳

『ジャーナリズムの倫理』

(新紀元社・発行一九九三年八月
B6判・三四四頁 二、〇〇〇円)

昨年秋季に起きたテレビ朝日報道局長発言をきっかけに議論されている「メディアの公正、公平」を考える際、米国の市民・メディア・国家（政府）の関係を明らかにした本書は示唆に富んでいる。

米国におけるジャーナリズム誕生の歴史を説明した上で、レーガン氏ら歴代大統領の広報戦略、放送メディアの登場、NASAと科学記者との癒着、ハート議員の女性問題、キューバ侵攻計画など豊富な実例を挙げて報道の在り方を検討する。専門書ではないために非常に読みやすい。

本書は、社説などの意見と客観的事実の報道を区別することなど基本原則を丁寧に紹介し、ジャーナリストは、「その倫理基準が社会全体の利害に関係する重要な職業の一つ」だと規定する。日本では、朝日新聞記者は、ジャーナリストである前に朝日の社員という意識を優先するため職業としてのジャーナリストは存在しにくい。

ジャーナリズムの倫理の基本原則が全米新聞編集者協会の原則声明に沿って解明される。職権乱用、ニュース源との関係、メディアイベントなどに関し、様々な見解をそのまま紹介。その上で、著者の考え方を明らかにする。第七章は「公正な記事の作成」を取り上げる、この冒頭に盗作を挙げている。日本の新聞・放送局が内外の通信社、地元新聞から情報を盗むことは珍しくない。

名誉毀損の項では、対メディア損害賠償請求訴訟が、「報道する側を萎縮させる」(九〇頁)、特に小さな新聞社や放送局には現実的脅威となると書く。著者は結びで、ジャーナリストは売るために人気を高める商業主義と、それがどんなに不人気なものである「真実の報道」を目指すという、この二極の緊張関係の中で仕事をしていると述べる。私はこの二極を収斂する方策として、読者・視聴者による監視の目を強調したい。メディア以外には、それぞれ監視機関がある。メディアだけではそれがないのである。スウェーデンなど北欧のプレスオンプスマン・報道評議会の制度が参考になる。

本書には、ユネスコなど国際機関や各国メディアの報道倫理綱領が載っている。ほとんどが訳者の渡辺教授による新訳である。教授は『世界のマスコミ倫理綱領集』を準備している。一日も早く完成してほしい。

また渡辺教授の「やらせ」についての論文も収められている。この中で紹介された「なるほどノザ・ワールド」の放送内容をめぐる、教授と共同通信社（評者が二二年間勤めた社団法人）との交渉経過を読めば、メディアへのアクセスの難しさがよく理解できるだろう。日本のメディアは、いまだに「無謬性の信仰」にしがみついているように思える。どんなに優秀な記者も、間違えたり、驕ったり、ひるんだりするのだという前提で自制が必要だろう。教授が提唱している日本メディア委員会を含め、議論の活発化を期待したい。

浅野健一（大学文学部教授）

石黒昭博・山内信幸・赤楚治之・友次克子・北林利治共著

『現代の英語学』

(録)金星堂・発行一九九三年十月
(A5判・一八四頁・二、六〇〇円)

現在、全国の大学・短大の英文科では、英語学概論が必須または選択科目として教えられている。小生も英語学を教え始めて六年目になるが、いつも使用するテキストの選択に悩んできた。短大レベルで講義するためには英語で書かれたテキストは、内容把握以前に英語読解力の問題で時間を取りすぎるため日本語で書かれたテキストを使用することになる。これまで小生は二冊のテキストを使用してきたが、最初のものは内容が文法に偏りすぎて、学生の実態と合致しなかった。

次に使用したのがエイチソン『入門言語学』だったが、これは言語学の本質的な問題を変形文法(改訂標準理論)を中心に説明している。読むたびに味が出る感じで、なかなかの名著であるが、内容的に変形文法に偏りすぎるくらいがあり、特に四年制大学への偏入を考えている学生には、やや

不十分であり編入希望者用にプリントを使用する必要があった。

そこで昨年十月に同志社大学の石黒昭博教授を中心に新進気鋭の同志社育ちの若手研究者たちが、英語学のミニマム・エッセンシャルズを網羅したテキストを初歩からの英語学の勉強を始める学生向きに書き下ろしたのが本書である。著者たちの編集方針に賛同し、さっそく小生も本年度より本書を採用して、半年間授業で本書を使用してきた感想を以下に述べさせていだきます。

まず、本書が扱っている内容は、さすがに網羅的であり、英語学の授業で触れなければならない事項は全て含まれている。前期の授業では、第三章(英語の音構造)を除いて第七章までテキストを読み進んだ。テキストだけでは授業が単調になるので就職試験対策も兼ねて文法(特に統語論)のミニマム・エッセンシャルズのドリルや変形文法の枝分れ図をプリントで演習した。授業の前半はプリント教材を使用し、後半に本書を読み進み、必要最小限の説明を加えて重要箇所を下線を引かせるという形で

授業を進めた。特に第四章「英語の語構造」、第七章「英語の文構造3」、第八章「英語の意味構造」などは、普通の英語学のテキストでは扱わないようなテーマをかなり深く追求しており、教える立場にある筆者なども非常に参考になる内容であった。筆者は語用論などに興味を持ちプリント教材で機能構文論などを毎年授業に取り入れているが、本書では上手に導入されているので教材の使用が容易であろう。

あえて本書に望む点をあげるならば、①内容が網羅的であるために説明がやや短くなり単調な文体になっていること、②種々の用語の定義をそのまま学生に暗記させられるような形にまとめてしまった、③章末にその章の要点を含む練習問題をつけてもらえば学生が試験前にポイントがよく分かるであろう、などである。最後に初版本の宿命として若干のミスブリが、エイズの正式英語(51頁)などに見られるが、今回の改訂に期待したい。

貫井孝典(金蘭短期大学助教)

竹内 理・三根 浩編集・執筆

佐伯林規江・枝澤康代・高原まり子執筆

『情報社会と外国語教育』

(成美堂・発行一九九四年四月
A5判・一一三頁 二、〇〇〇円)

本書は、現職の外国語教員および、外国語教師を志す学生のために、情報化社会の現状、情報化社会での外国語教育のあり方を示す「道しるべ」として書かれたもので、次の八章から成っている。

第一章 情報化社会と教育 情報化社会

の特徴、教育とコミュニケーションの過程、教育のインフラストラクチャ(社会的基盤)が述べられている。

第二章 教育改革の視点 新しい教員免許法では、「教育の方法と技術」が必修科目

になったことから、情報手段の利用についての体系的な知識と技術の必要性が説かれている。

第三章 教育と情報メディアの歴史 二十

世紀に活用されてきた、さまざまな教育メディアの歴史を振り返りながら、二十一世紀の新しい教育メディアであるマルチメディアの可能性を紹介している。

第四章 L Lの理論的背景と、L

とその周辺機器が述べられている。ALH (Audio-Lingual Habit Approach) に基づき音声反復練習の機器として教育現場に導入されたLであるが、学習への動機づけの面では問題も指摘されてきた。しかし、L本来の機能および周辺機器の充実が進み、既存のメディアを統合的に取り扱えるようなコンピュータを導入し、学習の動機づけを飛躍的に高める可能性が出てきている。Lの役割を Language Laboratory から Learning Laboratory へ変化させることが望まれる。

第五章 CALL (Computer-Assisted Language Learning) 外国語教育の効率化

には CALL を避けて通ることは不可能な段階にきている。本章では、CALL を Listening, Pronunciation, Writing (Grammarを含む)の側面から掘り下げ、その現状を探っている。

第六章 外国語教育とマルチメディア

ハードウェアとソフトウェア両面から見たマルチメディアの基礎知識について述べ、外国語教育ではどのようなコンピュータ環

境(マルチメディアのプラットフォーム・Macintosh, F. M. Towns, NEC, ... など)が利用できるかが検討されている。

第七章 外国語教育と通信ネットワーク 複数の人間の間の双方方向のコミュニケーションを実践できるコンピュータネットワークは、教育過程がインターラクティブであり、思考、表現力を要求するものになる。したがって、従来の受信型教育から発信型教育への転換を可能にし、国際ネットワークを活用すれば、学習者の外国語運用能力向上に大きな貢献ができる。

第八章 情報モラル 同じ規格のパーソ

ナル・コンピュータが普及してきた現在においては、ソフトウェアの財産的な側面が社会的に認識されるようになってきた。また、ハードウェアには、非常に安全なシステムの中で、プライバシー侵害、コンピュータウイルスを含む大きな問題を引き起こす危険性があるので、時代に対応した電子モラルが必要になる。

以上簡単に内容を紹介してきたが、本書は、五人の執筆者が、それぞれ、英語教育、心理学、物理学の専門を生かして分担執筆

し、二人の編集者がネットワークづくりをして統一性をもたせ、非常に読み易い教科書としている。なお、巻末の Key Words と共に、第四・五・六・七章にある「さらに情報を得るために」と「実践コラム」は非常に有益である。

小田幸信（女子大学教授）

前川恭一著

『現代企業研究の基礎』

（東京森山書店・発行一九九三年十月）
（A5判・二九七頁 三、八〇〇円）

本書は、前川恭一教授が一九六〇年代前半から今日に至るまで蓄積されてきた現代企業の所有・支配・集積・集中に関する研究を集大成し、あらためて現代企業研究の基礎視角を提示されようとしたものである。

著者が現代企業の研究を中心的に取り上げる理由は以下である。つまり、「現代資本主義の基本的な経済的特質を集約的に担っている現代企業の新しい経済現象や経済過程を分析し、その内的本質的連関をとらえ、それを理論化し、現代資本主義分析の中に

位置づけていくことが必要である。その位置づけの中で現代企業研究と現代資本主義論との相互浸透が深まり、現代企業の一般的な本質的諸特質は内容的に深められ、個々の具体的な諸活動・諸現象は、より深いところから総体的に、因果的連関の中で解明されることができるといえよう」（11頁）。なぜなら、「現代企業は現代資本主義の支配的な環として、中心的位置を占めており、現代資本主義の諸矛盾の規定的諸要因が複雑に絡み合った、それらの諸作用の集中的発現の場となっている」（あとがき）からである。著者ならではのまことに壮大な構想というべきであろう。

こうして本書で著者は、「現代企業の所有構造と支配機構」（第I篇）を問い、「企業集中の世界史的展開過程」（第II篇）を検討し、「企業経営問題の史的展開と新局面」（第III篇）を追跡し、「国家独占的規制と日本の経営」（第IV篇）を考察されている。各篇で追求される諸課題、たとえば金融資本の支配の仕組みをどのように考えるか、所有と経営の分離をめぐる理論的諸問題は何か、世界史的な企業集中運動の特質は何か、大

企業の組織と管理をどう考えるか、また国際化の中で組織・管理の変化はどのようにとらえるべきか、日本の経営の特質をどのように考えるか、などの課題を追跡されている。実は、これらのテーマこそ現代企業研究でこれまでも集中的に議論されてきた課題であり、そしておそらくこれからもさらに深く検討されるであろう重要問題である。したがって、本書は現代企業研究の中心に位置する課題に真つ向から取り組まれたものであり、著者の言われる現代資本主義の経済的諸特質の集約的あらわれを直視し、鋭い分析のメスを加えられたものである。

著者は、ご自身の長年にわたるドイツ企業研究の成果、中小企業研究の成果などを軸に、生産の集積に関する検討や日米欧の国際比較を加味して、これらの諸課題を理論的・実証的に縦横に論述されており、多くのことを教えられる。読者は、本書をもとに確実に「企業研究の基礎」について考えることができる。

岡本博公（大学商学部教授）

伊藤史朗・八田英二・広江満郎
佐竹光彦・北川雅章 著

『日本経済の解明』

(晃洋書房・発行一九九四年四月
A5判・二〇四頁 二、四〇〇円)

本書は日本経済の入門書として書かれた。単なる研究書ではない。したがって、その紹介にもすくなくとも二つの視点が必要であろう。日本経済をどのような観点から分析しているか、と同時に、入門書としてどのような特徴をもつかの二点である。しかし、限られた字数で詳細な紹介はできない。以下、この二つの点を考慮しながら簡単に本書の特徴に触れたいと思う。

本書は日本経済を動態的に検討している。つまり、近年、日本経済は変化している。またしつづけるとの視点からその構造変化を分析しているのである。そして、このような視点から、まず戦後日本経済の全体的な構造変化を展望した考察がくる(Ⅰ章)。ついで、個別領域へと移り、消費の高度化傾向をはじめ国民生活が検討され(Ⅱ章)、経済のソフト化を中心に産業構造の変化が論じられる(Ⅲ章)。さらには、日本企業の

諸特質(Ⅳ章)、金融の自由化・国際化(Ⅴ章)、財政の動向(Ⅵ章)、日本と世界経済との関係(Ⅶ章)、そして公共部門と関連した経済問題(Ⅷ章)、の分析を通じて、それぞれの領域においてどのような変化が生まれているかが、今後の動向をも視野に入れながら解明されているのである。

それでは、こうした分析のなかに入門書としてどのような工夫がおりこまれているのか。第一、豊富な図表が随所にある。第二、分析の基礎となる簡単な理論的説明が多い。前者は視覚的理解にたいする配慮であり、後者は経済現象の端的な把握に役立つ。ともに、入門書として初学者の感覚的理解を考慮した工夫であるが、後者の有効な利用はとくに重要である。なぜなら、実際の経済にたいする初歩的な理論分析の提示は、たとえていえば、簡単な物理法則から自然現象を解明したときのような理解の実感を生み、現実経済の明確な知識をあたえることが多いからである。実感のない知識は応用力にとぼしく、使えない知識をあたえる入門書は不適切だと考えれば、そのような実感を生むための工夫が入門書に

重要であることはいうまでもないだろう。ただ実感が生ずるにはある程度の知識を前提とするが、それには現実経済の知識を提供しながら理解分析しうるこの種の入門書の利点であり、本書はその利点の活用にはば成功しているように思う。

そして、こうした成功には執筆者全員が計量的研究に従事していることと無関係でない。計量研究者にだいたい共通するが、本書でも説明の背後に計量による実証の重みがある。実証なしの理論で現実経済を分析した場合の空論がはいる余地がすくない。そして、その実証は適当な理論にもとづいているはずだから、現実経済の説明とその理論的分析の組合せに不都合がすくないのも当然であろう。また、豊富な図表の構成や経済の動態的捉え方なども計量研究者の特徴を示すといえる。

そのほか言及すべき事柄がいくつかあるが、他の機会にゆずり、執筆者諸氏の今後の努力に期待し、紹介の筆を擱くことにする。

近江健吉(大学経済学部嘱託講師)

木村良巳著

『新約聖書への旅』

(日本基督教団出版局・発行
一九九三年十二月 一〇二頁 八〇〇円)

敬愛する友人である木村先生の書が出版され、同じ聖書科の教師として、とても励まされた。木村氏らしい味付けとなっている。彼が今まで関わってこられた活動からの問題提起はわたしたちの心を根底より揺さぶる。

聖書のコンテキストに注目し、聖書自体の、すなわち、パレスチナの歴史的現実から再度聖書のメッセージを聞き、現在に投げかけられている問いを見つめ、その問を共に担って行く方向で、全体がまとめ上げられている。非常に斬新な出来栄である。私たちが本来、目指さなければならぬ方法論である。無論、キリスト教自体その方法論によって、発展してきたと言えようが、日本においては、欧米諸国で発展したキリスト教を翻訳作業によって、社会に適合させようとしてきた所がある。故に、現在でも、キリスト教の印象に西洋的なものをイメージする者は多いと言える。このことはキリスト教主義学校においても同様に言え

るように思える。そのため、現存する多くの教科書には西洋的香り(いや、匂い)が漂っていた。しかし、この『旅』の本にはその匂いが無い。

木村氏自身のアジアでの体験から問いが発せられ、そして、彼自身の生きている生活空間から問いが発せられているためである。その意味において斬新な『旅』の本である。また、掲載されているカット、ならびに写真などが彼の観点を助けている。

特に、柏木牧子氏のクリスマスのカット(P 27)やキム・ハスク氏の作品(P 19)、渡辺貞雄氏の『最後の晩餐』(P 39)は読者の視点を西洋文明に支配されたキリスト教からアジア、そして、日本のコンテキストでのキリスト教理解へと導く。

全体としては、実におもしろくできあがっているが、少しばかり批判を加えさせていた。教科書としては、もう少し細かく出典が明確にされるとさらに良かったと思う。例えば『善いサマリヤ人のたとえ』によせての部分で朝鮮人の居住人口が載せられ、その後、帰国した被爆者の数等載せられているが、やはり、明確な資料・出版

を提示する必要がある。人を見つめ、コンテキストのただ中の人の苦しみを見つめる視点をはつきり打ち出すためにも、この当たりはいいねいに扱うほうが良いと感じた。さらに、木村氏自身のむすびに「くれぐれも、自分の具体的体験を通して言葉化していただくさい。」とあるように、現場の読者(教師や生徒やこの本と出会った人々)はその言葉化において、自身の具体的コンテキストでの問いかけの作業の必要を迫られる。その意味においても、資料ならびに参考書籍類が明確であると、より良い自己の作業に臨むことができる。

また、自分たちの具体的体験から具体的問題意識へと呼び起こされる作業の過程が提示されると、もつと良かったように思う。共に教室や現場で課題を担い合う作業を導くプログラム等の紹介があるともつとよかった。その作業を通して、互いが旅の仲間であることを確認できると思う。

厳しい教育の現実ですが、旅を続ける力を与え、共に旅する喜びを与えてくれたこの『旅』の本ならびに著者に感謝いたします。
小崎 眞(女子中高教諭)

高原まり子著

『壮絶なる星の死』

(培風館・発行一九九四年四月
B6判・一六二頁 一、四八〇円)

天空の一点にある日突然、強大な光を放つ新星が出現する。あまりの明かるさのために、真昼の太陽の輝きでさえその星をかき消すことができないことがある。なぜなら、天文学上「超新星」と呼ばれるこの星は、百億個の太陽を集めたほどの、想像を絶するエネルギーを放って輝くからである。

超新星は、実はその名で暗示されるような新しい星の誕生ではなく、本書の表題のごとくその逆の、死に瀕した星の壮絶な爆発、いわば断末魔の現象である。著者は超新星爆発の理論研究者であり、本書は著者自身の研究成果を含めて、超新星の正体についての最新の学説を克明に解説する。

周知のごとく自然科学では、研究成果は一般に論文として発表され、著書によって独創的な研究を世に問う例は少ない。それ故科学書の性格は、若手への指導書(教科書)であるか、科学研究で得た新しい知見

の紹介が多い。研究者が本書のような一般書を著すには、人間の本能的欲求ともいえる知的好奇心による研究への情熱とはまた異質の、社会へ科学文化を伝え広めたいという情熱と、それだけでは済まず、日常用語とは遠く隔たった専門用語・概念を分かり易く伝えることの困難さを克服する実践的な技術を要するだろう。本書でもこの点に著者が多大の労力を要したことが窺える。

いささかもケレン味のない、まさに研究者らしい叙述振りであり、何が解決され、何が未だ完全には解明されていないかということがきわめて率直に述べられており、しかも手際よくまとめられている。

本書の特徴は第六章にある。そこには一九八七年に出現した超新星を、理論家と観測家とが如何に熱中して協同研究したかが、五〇頁を割いてしきしきわめて冷静な筆致で紹介されている。この研究では日本が世界の先頭に立って次々と第一級の成果を生み出し、今もなお世界をリードし続けているのである。何よりもまず研究者をあとと驚かせたのは、神岡鉱山の地下深くに

設置された観測装置がこの超新星から飛来したニュートリノを一個検出したことである。これは世界にニュートリノ天文学の時代が今や到来したことを認識させた。さらにこの超新星が放射したX線を日本の観測衛星「ぎんが」がキャッチしたのである。これらの観測結果は、超新星爆発の研究を飛躍的に発展させた。爆発七年後の今日もなお観測は終了していない。今や首を長くして待ち望んでいるのは、この超新星の中心に中性子星が誕生したことを発見することである。

一方理論分野でも日本の研究者達は、電算機を駆使して世界の第一線で超新星爆発のメカニズムに迫っている。ちなみに著者のご夫君も同じく理論天体物理学者として、都立大学で若手を指導されつゝ縦横に活躍されている。お二人は日常は余儀なく東京と京都に別れての研究生活であるが、まさしくおしどり夫婦である。

成田真一(工学理工学研究所教授)

小林章夫著

『大英帝国のパトロンたち』

(講談社・発行一九九四年二月
四六判・二八〇頁 一、五〇〇円)

『イギリスを見に行こう』

— 僕なりの英国観 —

(同文書院・発行一九九四年四月
四六変判・二〇六頁 一、二〇〇円)

『イギリス精神』

— 紳士の国のダンディズム —

(PHP研究所・発行一九九四年五月
B6判・二一四頁 一、五〇〇円)

相次いで三冊の本を公にされた小林氏の旺盛な活力には、唯呆れるしかない。昭和五十九年の処女作『コーヒー・ハウス』から十年、着実に研究分野を広げられ、昨今のイギリス・ブームに火を付けたのは小林氏の功績であろう。三冊が今年前半に発刊された事から、重複した箇所があるうとの大方の見方は的外れで、其々が独立している。中でも『大英帝国のパトロンたち』は出版社の選書創刊の意をうけてか、小林氏の打ち込み様が偲ばれる労作である。同書ではパトロンの語義に始まり、ギリシャ、

ローマ時代からメデイチ家に至る歴史的变化にふれた後、英国のエリザベス女王とその時代における文筆家とパトロンの関係が詳述されている。王侯貴族と三文文士の関係、桂冠詩人推挙の出鱈目さ、パトロンと文人との数奇な出会い、予約出版の実態や海賊版の出現、作家の版權の歴史的推移等が系統だつて例証され、小林氏の明晰ぶりが窺える。同書後半は英国ジャーナリズムの台頭と時を同じくする文人として、十八世紀前半に活躍した詩人ポーブと後半の文壇の重鎮ジョンソン博士が挙げられ、経済的自立を果たした文人達によるパトロンからの離脱・決別が記される。王侯貴族に代表されるパトロンの消滅と、購読者としての広範な読者の誕生に至る過程に興味深い逸話を織り込んで纏め上げた研究書と言える。

『イギリスを見に行こう』は目に優しい緑の活字と女性好みの装丁で、エキセントリック・ジャーニの英語表題も付いていることから、英国人の奇癖、奇行を範疇とするが、スポーツやペットに酒と「男と女」の恋云々と、ユーモア溢れる英国案内書であ

る。『イギリス精神』の第一章には少々驚かされた。近年の同業者の著書を羅列し、H氏の本は続々再版されているとか、M氏は精力的に執筆されているとか、イギリス・ブームを解明するためと言え、小林氏の謙虚さを垣間見る思いがする。この事は今回の書評対象全てに言えることだが、惜し気もなく同業者の業績紹介の労を取るあたり、小林氏の度量の広さを物語る。もつとも、自著の推薦を忘れるほどのお人好しではないが、『イギリス精神』はその副題が示すように、ダンディの元祖であるブランドルの紹介に端を発し、英国での筆者の体験をもとに、フォースター原作の映画等も介して、英国人の衣食住に焦点を当てた軽妙洒落な情報満載の書である。政治家の余技とアマチュアリズムを論じる項では、本業は無論、余技でも卓越した力量の持ち主は認められるのが英国とする筆者の指摘に、本業もままならぬ我国の政治家、元政治家の姿を思い浮かべるのは論者のみであろうか。

自らのパトロンである出版業界の意向に沿いながら、女子学生から研究者に至る幅

広い読者の関心を掴んで放さない小林氏のテーマ設定と論旨の展開には、同氏の飽くなき知的探求心が反映されてきたが、この度の三冊三様の書籍も、小口のパトロン気分には読者をいざなう良書である。

能口盾彦（大学言語文化教育研究センター教授）

岩崎泰男訳

『十七世紀末の英国事情』

——デフォアの社会改善計画——

（同志社大学出版部・発行一九九四年）
B5判・二八一頁 二、五〇〇円

本訳書の著者ダニエル・デフォアは、『ロビンソン・クルーソー漂流記』の作者としてひろく知られている。この『ロビンソン・クルーソー漂流記』は、同志社創立者の新島襄が日本を出国するまえにオランダ語訳からの抄訳『魯敏孫漂行記』を読んで大きな感動をうけた物語でもある。この作品を含むいくつかの物語を書いて、近代小説の誕生に大きく貢献したデフォアは、文筆の分野で才能を発揮しただけではなく、商人としても活躍し、またタイル工場の経営にたずさわったり、今という経営コンサルタ

ントのような仕事もこなすなど、多芸多才の人物であった。もちろん、万事において成功をおさめたわけではなく、一度ならず破産宣告をうけたり、多額の負債ゆえに逮捕されたり、まったく忙しい生涯を送った。

デフォアは七〇年にわたる生涯において、きわめて多くの著作を公にしたが、本訳書『十七世紀末の英国事情——デフォアの社会改善計画——』は彼の最も重要な著作の一つであると考えられている。

この著作は、銀行、保険、共済年金組合、女子教育などについての著者の「企画」を披露するもので、内容は多方面にわたっている。訳者の岩崎泰男氏は、すでに一九七八年にデフォアとほぼ同時代を生きたジョン・アーバースノットの『ジョン・ブル物語』の訳書を出されており、さらに一九八二年には十七世紀末から十八世紀前半にかけてのイギリスの文学をとりまく社会的諸事情を綿密に検証する『スウィフトの時代の政治と文学』を公にされた。本書がこのような訳者を得たことはまことに幸いなことである。本訳書の末尾につけられた訳注は、この時代のイギリスの諸事情についての専

門的知識をもたない読者にもデフォアの発言の意味をなんとか伝えたいという訳者の気持ちがありありとかがえる貴重な注である。

訳書の「まえがき」にもふれられているように、デフォアが本書でとりあげている問題のいくつかは、単なる過去の問題では決してなく、現代社会とも深くかわる問題である。昨今しばしば話題にのぼる「パブル経済崩壊」ということばの「パブル」という語は、まさにデフォアの時代のイギリスの経済状況に由来するものである。そんな意味で、本書におけるデフォアの「企画」のいくつかたとえば「知的障害者について」と題する一文における彼の主張——は、われわれ現代人にとっても決してひとつとは思えないはずである。

ダニエル・デフォアのこの著作が、よき訳者を得て、わが国の読者に身近なものとなったことは喜ばしいことである。

高山 修（女子大学教授）

鵜飼哲夫著

『株式発行の会計理論』

(森山書店・発行一九九四年三月
A5判・二一〇頁 三、二〇〇円)

企業会計の機能のなかで最も重要なもののひとつが「利益」の計算であろう。なぜなら会計上の利益額はステークホルダーにとって最大の関心事にはならないからである。つまり経営者、債権者、株主にとっては配当、役員賞与に関して対立する利害の裁定機能を持ち、法人税や公共料金に関しては市場価格に代わる富の分配基準として機能し、さらに上場企業の公表利益は証券価格(資本市場)を変動させて生産資源の企業間配分を左右するからである。

ところでその利益であるが、これはよく「果樹」から産み出された「果実」として説明される。株式会社の場合であれば、株主から投下された「資本」が収益的に運用されて増加したとき、その増加額が「利益」となる。すなわち企業会計上の利益計算とは、つまるところ、この資本と利益の区別にほかならないのである。

しかしながら現実の企業取引に直面する

とき、資本と利益の区別は決して容易ではない。むしろこれは会計学上の最大のテーマの一つであり、両者の境界線上に位置する「資本剰余金」項目の性格規定については大正時代から論争が繰り返されてきた。その際、論争の中心におかれてきた項目の一つが株式プレミアム(＝株式の時価発行額・額面金額)であり、本書でもこの株式プレミアムの会計上の性格規定が主題となっている。

ここで本書の構成を紹介すると以下のとおりである。まず第1章では株式プレミアム論争を考察するための予備的考察として企業会計原則上の資本剰余金規定が取り上げられており、それとの関連で持分均衡説(資本説)と創業利得説(利益説)の株式会社観の違い、そしてその論理構成が検討されている。次に第2章と第3章では、創業利得説に立つ内川菊義教授と拠出資本説(資本説)を採る岡部利良教授の論争内容が、①プレミアム論における利潤率の問題、②機能資本の理解、③プレミアムの「処分可能性」の意味を中心に分析される。その結果、著者は改めて株式プレミアムを証券

市場を介して実現した創業利得の一形態、したがってその会計上の性格は利益であると規定する。さらに第4章と第5章では、近年、創業利得説を批判した生駒道弘教授の擬制資本形成モデルと、数年前に著者の学説を批判した醍醐聡教授の「新持分均衡説」が取り上げられており、両教授の論理矛盾を鋭く批判する形で理論のより一層の展開が試みられている。

著者の鵜飼哲夫教授は、大学院時代から資本剰余金関連項目の性格分析に取り組んできた規範論学派の会計学者であり、本書はその研究成果の一部をまとめたものである。各章の論理展開は緻密にして明快。パズル解きの面白さすら感じさせる。株式時価発行が定着した今日、株式プレミアムの性格規定問題は一層の重要性を帯びている。会計学徒以外にもぜひ一読を薦めたい本格派の研究書である。

松本敏史(大学商学部助教授)

中條 毅・竹中正夫編著

社会人大学セミナー

『労働と人間を考える』

(中央経済社・発行一九九四年三月
A5判・三二九頁 四、二〇〇円)

京都修学院の関西セミナーハウスを学舎に、一九六七年より毎年一ヶ月近くの合宿形式による教育研修として開催されてきた、全日本金属産業労働組合(IMF-JC)の「西日本リーダーシップコース」は今年二五周年をむかえた。本書はそれを記念して企画され、これまでにこのコースの講師を務めた、編者など二十二人が講話のエッセンスを論文として寄稿している。ハードカバー、A5判で三三〇ページもの大著。

内容は、第一章「労働と経済」、第二章「歴史と思想」、第三章「国際関係」、第四章「経済と労働」、第五章「人間と文化」に分かれ、編者と書名から推察できるように、「二世紀を世界に向かって力強く生きぬくため、広い視点と史的展望から日本の関連分野の代表的英知・識見・人間探究をテキストの

形に編んだ」(はしがき)ものである。

他の執筆者を何人か紹介しておく。宮田義二(国際産業・労働研究センター理事長)、松下幸之助(松下電器産業株式会社社長――当時)、亀井正夫(住友電気工業株式会社相談役、高坂正堯(京都大学教授)、小島正剛(全日本金属産業労働組合協議会副議長)、石田光男(同志社大学教授、高島順子(日本労働組合総連合会女性局長)、平田哲(関西セミナーハウス所長)、などである。

これだけのメンバーをそろえて書物をつくるとたいてい総花的になり深みに欠けるものだが、本書の自身は濃く、かつ産業と国家の論理としての一貫性をもち、これ一冊で戦後日本の経済発展の主流を形成してきた、日本の基幹産業における労使協調のあり様があますところなく理解できる。

さて、この労働リーダーシップコースの目的は「複雑な現代産業社会の動きに対応する労働組合の機能を強化し、近代的労使関係の確立と労働福祉の増進を図り、もって産業社会の発展に寄与するためにわが国における基幹産業に働く中堅労働組合員に

対して、大学水準の基礎的教育を行う」ことにあるという。

当然この視点からはそれらの基幹産業を現実的に支える下請け工場とその労働者の問題や、日本の労働賃金があればそうした基幹産業でさえより安い労賃の諸国へ生産部門の移転をはかるという問題、さらには文化システムの異なるそうした移転先の労働者たちと日本と日本人はどう連帯していいのかといった問題、などは出てこない。また私などから見ると、二一世紀に向かう労働界のリーダーの養成を行おうとすれば、広報・宣伝といった狭い大衆説得の技術だけではなく、広い意味でマスメディアにどう接し、それをどう効果的に利用するかといった「メディア・トレーニング」なども不可欠な柱の一つになるはずなのに十分な扱われ方がされていない。本書のような「戦後日本労働産業哲学入門」ともいえるすぐれた概説書にも今後に残された課題だといえよう。

渡辺武達(太学文学部教授)

伊藤史朗・八田英二編著

『実証 日本経済』

——現在・過去・未来——

(晃洋書房・発行一九九四年四月
A5版・二二七頁 二、七〇〇円)

わが国経済のグローバル化が指摘されて久しい。経済力が強まるにつれ、わが国経済の動向が内外の注目を浴びるところとなってきた。この動きと軌を一にするように、わが国経済の研究も年を追うごとに活発となっている。実際、書店の本棚には、「日本経済」と銘打った書物が所狭しと並べられている。

程度の差はあれ、日本経済の分析には理論と実現のすりあわせは不可避であろう。「読者の理解が第一」と心掛けるとき、理論とデータをどのように結び付けるかが著者のもっとも苦労するところである。日本経済を取り扱った従来の書物では、グラフや数値にの提示に重点をおきながら経済活動を跡付けるといふ手法が一般的なようである。もっとも、簡単なデータの提示では、もことになる経済理論の位置付けが不明瞭に

なるというそりを免れない。

理論とデータをめぐる議論に鑑みて、初歩的な数量分析手法を利用して、わが国経済の解明を試みたものが本書である。理論の実証という観点からは、やはり相関分析と最小二乗分析に頼らざるをえないだろう。その意味では、本書は中級程度の日本経済研究書とランク付けできる。しかし見方を変えれば、日本経済を題材にとった数量分析手法の手引書とみることもできよう。見方はともあれ、理論、データともに「実証」というタイトルに十分に値する中味を備えていることに間違いはない。ちなみに、このような手法をつかった分析の代表的なものは「経済白書」であろう。もっとも、経済白書は啓蒙書ではなく、当然のことながら、理論を前面に押し出すものとはなっていない。

本書は関連する経済理論を簡単に要約、提示し、その理論を実証するという形で数量分析を行っている。数量分析といえは、複雑な統計手法を思い浮かべられるかもしれないが、本書は初歩的な統計知識さえあれば、読み進むことができるように随所に

工夫が凝らされている。序章で相関係数と最小二乗法の分析結果の見方が手際よく紹介されているのは、その一例であろう。また、統計結果を付表に掲げるという形をとり、複雑な統計解釈が苦手な読者にも、結論を読めば一応の結果が理解できるようになっている。

さて、本書で取り上げられたテーマであるが、最近の日本経済の直面している諸問題が随所に散りばめられている。経済成長と景気循環(第一章)に始まり、インフレーション(第十章)に至るまで、今日の日本経済の理解には必須の十種類のトピックが理論と実証の両面から提示されている。日本経済を本格的に学びたい学部学生や社会人、あるいは統計学の素養のある者には必読の書であろう。

吉田裕之(大阪商業大学商経学部助教授)

中井悟、龍城正明、山内信幸編

『ことばの樹海』

— 石黒昭博先生還暦記念論文集 —

(英宝社・発行一九九四年四月
A5判・五五八頁・二、〇〇〇円)

本書は石黒昭博先生が一九九四年一月七日に還暦を迎えられたことを記念して出版された論文集である。石黒先生は、一九九二年に同志社大学に提出された博士論文を昨年南雲堂から『近代英語における文語の概念』として上梓され、英語学研究に貴重な貢献をされた。ほぼ同じ時期に先生の海外の友人及び薫陶を受けた研究者たちによるこのような論文集が出版されたことは大変喜ばしいことである。

本書の最も大きな特徴はその豊かさと同様性にある。本書は読者を現代言語学が切り開いた「ことばの樹海」へと誘ってくれる。石黒先生の大学での講義は、英語学研究を教育の中心としながらも英語学という狭い枠を越えて広く言語学の分野を見渡す偏りのない視点を忘れないものであった。これは先生が若い頃にアメリカの大学で研鑽をつまれたこととも関係しているように

思われる。本書に見られる豊かさと同様性という特徴は、大学での先生の緻密でありながら同時に自由な雰囲気溢れた講義と不思議に符号している。

本書の30編の論文は分野ごとにグループにまとめることができる。限られた紙面では、個々の論文を全て紹介することはできないので、分野ごとにその一端を紹介する。まず、統語論の分野に属する研究では、束縛理論に関わる数編の論考がある他に、英語の心理動詞の項構造を名詞化との関連で論じた論文などがある。これらは、「原理とパラメターの理論」と呼ばれる最近の理論的枠組みでの言語研究への貢献である。この他にも、日本語の統語解析、格文法による複合語の分析、関係文法による日本語の使役文の分析、体系機能文法の枠組みで日本語の主語を論じたもの、認知文法の枠組みでの使役のHaveの分析などがあり理論的にも極めて多彩である。意味論・語用論の分野では、領域という概念による英語の冠詞の特質の分析、日本語の使役文と受益文の意味特性の分析、隠喩の解釈、談話分析、vice versaの照応的特質を論じた研究

などがある。第二言語習得の分野では、第二言語習得における文法の役割、ハンガリー語の接頭辞の獲得などの研究の他に教授法に関するいくつかの論考がある。この他の分野では、スピーチエラーに基づく音韻分析、言語普遍性の2つの研究方法を比較検討した論文、言語学における「内的形式」という概念の変遷の考察がある他、言語政策に関する問題を扱った論文がある。

本書には、どこまでものびやかに成長し多様化して行く言語研究の発展の一つの瞬間をとらえた周密的な静物画といった趣がある。同志社を核として育った言語研究が着実にその成果を生み発展しつつあることを感じさせる好論文集である。

上田雅信 (北海道大学言語文化部)

玉置保巳著

『ゲーテの頭』

(編集工房ノア・発行一九九四年四月
四六判・二八五頁・二、〇〇〇円)

玉置保巳氏の詩の魅力は、微視と巨視の両面にわたる緻密な感覚が基盤となっている。病弱だった少年の頃、誠文堂新光社発行の「子供の科学」という雑誌に出会い、飽かず愛読したということを知ると、その基盤の形成が納得される思いがする。もちろん、和歌山県新宮の地の豊かな自然における出自も幸いしているだろう。

それにしても驚くほかないのは、優れた観察力と素晴らしい記憶力である。特殊な大仰な事件などではなく、あくまでも静謐な世界での対象の把握だからこそその並ばならぬ技倆、才覚だといえる。

しかし、どのように明快な作風であつても、詩というものは精神の凝縮力が濃い。そこを解きほぐし、「ああ、そうだったのか」と膝を打つ思いにさせて頂けるのが、実は私にとって大変貴重な玉置氏のエッセイ集なのである。

本書の表題作の「ゲーテの頭」は、詩人

天野忠氏と親交の深かった玉置氏ご夫妻が、天野氏のお宅を訪ねた折の、ほのぼのとしたエピソード。天野氏ご逝去の今となつては鎮魂の意をそなえてもいるが、改めて感動しないではいられないのは、玉置氏の文章のなから聞こえてくる天野忠氏の生身の肉声である。天野氏の話芸の至妙を、何とまあ巧みに再現していることか！天野氏は子供の頃、友達に鉄の打ちつけてある雪駄で殴られたのだそうで、その話しぶりが目に見えるように面白いのだ。

「自分で言うのも何やけど、私は子供の頃は神童やつたと思います。小さいのに人間の心というか、世の中のことが何もかも分かつてしても、頭の中が冴えかえつてましたな。それが、頭のとつぺんをボカンとやられてから、急にフニャーツとなつてしもて、それから一ぺんに凡才になつてしもたんです」

「妻は、その天野さんの頭を感にたえぬように見つめていたかと思つたら、『先生のおつむはゲーテの頭のかたちと似ていらつしやると思いますわ』と言つたものである。

『そいつは牽強附会いうもんです』と、天野

さんが答えた」

この僅かな引用、そして、例えば天野像を知らない人であつても、存分にこの場の雰囲気や堪能できるのではないだろうか。この後の玉置氏ご夫妻の「ケンキョウフカイ」という漢語についての応酬がまた楽しい限り。

この表題作「ゲーテの頭」は、いわば構成上の第一部に重い位置を占めている。玉置氏にとって大切な詩人たちとの出会いと別れ、日々ささやかな幸福をもたらしてくれた小さな生き物たちのこと。第二部に当るのが詩論。それから第三部が「邯鄲の夢」と題しての、少年時代の思い出。ここではベルグソンの哲学に通底する美しい認識があつて、読むたびに新鮮である。

青木はるみ(詩人)

神代修 訳

『大地の叫び』

(株)青木書店・発行一九九四年五月
A5判・一八六頁 二、二六六円

本書は、一九九二年にノーベル平和賞を受賞したグアテマラの先住民女性、リゴベルタ・メンチュと彼女が所属する農民統一委員会(CUC)により著されたグアテマラ農民の土地をめぐる闘争と先住民の抵抗の記録である。

グアテマラでは、一九五〇年代始めに、アルベンス政権が外国資本の土地を接収し、農地改革を推進しようとしたが、この政策に反対するクーデターが一九五四年に起こり、以降一九八六年に至るまで、軍事政権が支配した。特に八〇年代は、農民や労働者に対して、激しい弾圧が繰り返され、五〇万近い難民がメキシコ国境を越え、メキシコ、アメリカ合衆国に逃げ込んだ。

リゴベルタ・メンチュの一家は、グアテマラの二二ある先住民族中、最大のキチエ族に属するが、生計をたてるため一年のうちの八カ月を南部のプランテーションに出稼ぎに行き、そこで厳しい差別と搾取を体

験した。その記録は、文化人類学者エリザベス・ブルグスが聞き書きの形で綴った「わたしの名は、リゴベルタ・メンチュ」として出版され、一一カ国語に翻訳された。この聞き書きが、主として文化人類学的な視点から伝承された文化と、抑圧され差別されているマヤ系農民の生活誌の色彩が強いのに対して、今回、神代修氏によって翻訳された「大地の叫び」は、農民運動を担うリゴベルタ・メンチュの政治的、社会的活動が中心に書かれている。著者が所属するCUCは、土地の公平な分配、より良い生活条件、プランテーションにおける公正な賃金を要求し、差別と抑圧に対する闘争を続けてきた。政府の人権侵害に抗議するためスペイン大使館を占拠し、惨殺された父ビセンテ・メンチュは、CUCのメンバーだった。兄弟と母親を政府の弾圧で殺され、自らもまた亡命を余儀なくされたリゴベルタ・メンチュも、父親の意志を継いでこの農民組織に参加した。CUCの闘争の歴史は、グアテマラ農民の搾取と抑圧の歴史である。

著者の作品を通じ一貫して見られる姿勢

は、自分の歩んできた半生が、特殊なものではなく先住民と農民に共通した抑圧と搾取の歴史であるという認識であろう。「(本書は)わたしの名前が記されていますが、多くの仲間たちの集団の仕事であり、そのたまものです。彼らこそ、大地の、大地のためのこの叫びを生み出した人たちです。」この言葉にみられるように、彼女の帰属する先住民共同体と抑圧されたラディノ(白人とインディオの混血)を含めた農民との深い連帯意識が、親、兄弟を失う悲痛な闘争のなかでも未来への希望を失わず、明るささえ感じさせる本書の背景にある。随所で述べられる共同体や組織の「秘密」を保持するという戦略は、スペインの征服以来、五〇〇年にわたる抑圧の歴史を戦い抜き、歴史の表舞台からは排除され続けてきた先住民族の闘争を象徴するものであり、それは「先住民と民衆の五〇〇年の抵抗運動」を担う大きな力となった。本書は、リゴベルタ・メンチュの活動の全体像を知る格好の書となっている。

松久玲子(大学言語文化教育研究センター助教授)

浅野健一著

『日本は世界の敵になる——ODAの犯罪』

(三一書房・発行一九九四年五月)
(B六判・三八一頁二、七〇〇円)

著者の浅野さんは最近まで気鋭のジャーナリストとして、人権や民主主義を守る立場から旺盛な記者活動を行ってこられた方である。本書は、著者が共同通信のジャカルタ支局長として活躍された一九八九年二月から九二年七月までの三年半にわたって現地での取材活動をつうじて体験されたさまざまな出来事をまとめられたもので、文句なしに面白い内容である。大きくいえば日本の発展途上国に対する経済協力、とくにいわゆるODA(政府開発援助)の実態についての生きた教材であり、その犯罪性を告発する書といつてよいだろう。著者は本書の前に『出国命令——インドネシア取材二〇〇日』(日本評論社、九三年二月)を出され、インドネシアにおける日本のODAの実態や東ティモールの独立運動をめぐる悲劇などについて考察され、さらに自身のビザ延長拒否による事実上の追放の経過をあとづけられており、本書はその続

編というべきもので、両書はあわせ読まれることが望ましい。

本書は全体が三部に分かれ、第一部がニッポン外交官と企業戦士の実態、第二部がスハルト体制のたそがれ、第三部が揺れる東南アジアという構成になっている。内容を詳述する余裕はないが、第一部では日本の外務省や大使館、ビジネスマンの活動の実態を明らかにしている。エリート外交官は保身とODA予算の消化に熱心で、人権

の下に、開発を優先し、国民の政治的自由や人権を抑圧している実情がとりあげられ、大統領一家のいわゆるファミリー・ビジネスが政権上層部や華人財閥、日本企業を利し、国民の貧富の差を拡大している現実を追求している。さいごの第三部ではインドネシアと中国の国交正常化、ベトナムとアセアンとの関係、タイの民主化闘争などがあとづけられている。

あり、また大企業や商社のビジネスマンたちは結果として経済進出という第二の侵略に手をかしている状況が生き生きと描かれている。ODAについてはすべてが悪いわけではなく、たとえば東部ジャワのプランタス総合開発によるダム建設では現地への技術移転が順調に進んでいるが、他方では森林の不法伐採など環境破壊や人権抑圧を引きおこす事例も数多くみられる。商社のリベート合戦がインドネシアの官僚や軍人の腐敗を助長している点が強調されている。第二部では九三年三月に六選を果たしたスハルト体制が「開発のための安定」の名

本書は以上のようなさまざまな考察をつうじて現在の日本の経済外交のあり方、とくにODAの運用面における矛盾や犯罪性を摘出する内容となっている。日本の途上国援助には光と影の部分があり、とくに受け入れ国の環境に対する配慮の欠如を指摘する研究が進められているが、本書は専門研究者のそれとはひと味違ったアプローチで日本の経済援助の病根についてのいわば臨床材料を提供している。著者は日本が援助についての哲学をもつことの重要性を強調されている(一一八頁)が、本書は今後の日本のアジア政策についての反省材料と指針を示す好著であるといえよう。

藤村幸雄(大学経済学部教授)

尾崎寔訳

『とびきり愉快なイギリス史』

(筑摩書房・発行一九九三年十一月
四六判・二六〇頁 一、九八〇円)

小林章夫訳

『とびきり哀しいスコットランド史』

(筑摩書房・発行一九九四年三月
四六判・二二七頁 一、九八〇円)

尾崎 寔氏が訳された『とびきり愉快なイギリス史』と小林章夫氏が訳された『とびきり哀しいスコットランド史』とは姉妹書と呼んでいいものだろう。それは出版社が同じであるとか、訳者が同僚であるとか、どちらも歴史を扱っているとか、「とびきり」という題名を共有しているということもあるが、それよりも「愉快な」と「哀しい」という反意語の形容詞で象徴的に響き合わせているのだが、ある意味で相互補充しているからである。まさに、歴史の悪戯でブリテン島を共有することになったピクト族とスコット族、それにアングル族とサクソン族との確執が生み出した歴史がその二書をつなけているのである。

この確執から教えられることは二つある。一つは、前著がケルト族(ピクト族やスコット族を含む)が住んでいた頃から第二次世界大戦の終わりに迄扱っているのに対して、後者は一八世紀の始めまでを扱っているものの、実質一七世紀末迄と言った方がいいだろう。

ことの次第はこうである。チューダーのメアリーはカトリック教徒を迫害したことによって「ブラデー」という形容詞を被せられているが、チューダーのメアリーもエリザベスもスチュワートのメアリーとヘンリー七世の血(ブラッド)を分かち合っているが、エリザベスはチューダーのメアリーを斬首し、イギリスがスコットランドを呑み込んだかに見えて「愉快(ブラデー)」なんだろうが、皮肉なことにスチュアートのメアリーの子ジェイムズ六世がエリザベスの後、イギリスの王位を継ぎ、スコットランド(スチュアート)がイギリス(チューダー)を呑み込むことでスコットランドは「愉快(ブラデー)」になったはずである。しかし、スコットランドが「哀しい(ブラデー)」歴史をたどることになったと

すれば、チューダー、いや、イギリスの所為であるよりは、スチュアートの流れを汲む者たちが一七〇七年の連合法によって自国を売り飛ばしたことが最も「哀しい(ブラデー)」むべきことだったのである。ここでスコットランドの歴史は終わってしまうのだから。

しかし、スコットランドの歴史がイギリスの歴史に呑み込まれた後、イギリスの歴史はアングル族やサクソン族がケルト人を追い払い、途中、ヴァイキングに襲われることはあったが、相も変わらず強者の歴史であつたということである。プランタジネットのエドワード一世はユダヤ人を追放したが、プランタジネットの始祖ヘンリー二世がアイルランド征服を試みてから、チューダーの王たちも、スチュアートの王たちもその考えを変えることはなかった。スコットランドやフランスとの確執に加えて、このアイルランドへの野心こそ、イギリスの歴史を現代までに引っ張ってきた大きな動力であつたことを今更ながら思い知らされる。

二つ目は、これこそとくに注目に値する

ことなのだが、両著者が歴史学者でないということであろう。前著の著者は王立美術大学でデザインを専攻したイラストレーター、後著の著者はオックスフォード大学出のレイヴンストーン城主の男爵である。そのため、両者は、史観とか、方法論とかに煩わされずに、自由に発想出来たのだ。ひとつの国が他の国に侵略することはいけなしいとする認識は、何といつても歴史を正しく認識することから始まる。自国の歴史を正しく認識することは、他国の歴史を正しく知ることにつながる。だから、自国の歴史を正しく認識するために自国の歴史を書くのはまたとない方策である。歴史学者でないこの著者たちが読者に勧めていることは、まさにこのことでないだろうか。すなわち、自分なりに自分の国の歴史を書いてみるべきである。

最後になるが、両訳者のこなれた訳は、訳者自身にとっては「哀しい」ほどしんどい仕事だっただろうが、読者にとってはとつともなく「愉快」な読み物になっていることは記しておくべきであろう。

坂本完春（大学文学部教授）

『創設期の同志社』

——卒業生たちの回想録——

初期の同志社を語るとき文献としてまずあげるのが、この『創設期の同志社』である。

収録されているのは、安部磯雄、深井英五、海老名弾正ら、英学校に学んだ四十六名。湯浅初子ら女学校に学んだ十五名である。

勧める理由は、読みやすく、しかも面白いからだ。構えて書いた堅苦しい歴史叙述ではなくて、ざっくりばらんに在学時代の思い出を語った談話を要約筆記したものだからである。

彼らはいと楽しいに、寮、授業、娯楽、食事、宗教活動など、当時のいわゆるキャンパス・ライフを語る。関連して新島襄、デイヴィス、ラーネッド、山崎為徳らをはじめとする教員たちの思い出を語るのである。すべてが生き生きとしている。

面白くて読みやすく、しかも従来あまり明らかでなかった初期同志社の側面がえがかれていて、資料的価値も高い。

だれよりもまず、学生生徒諸君にぜひ読んでもらいたい本である。

A5判四五二頁

頒価一、五〇〇円

発行・同志社社史資料室
取扱い・同志社収益事業課

(〇七五)一二五一—三〇三七・八